

<p>目的・目標</p>	<p>共生社会の実現に向け、地域で障害のある子もない子も同じ場所で共に学び育つ「インクルーシブな学校」を構築するために、障害のある子とない子が共に協働的に学ぶことと、一人一人に応じて個別最適に学ぶことが両立する指導方法等の研究を行う。そして、そのことが可能となる教育課程の編成・実施・評価の開発を行うことを本研究の目的とする。</p>		
--------------	---	--	--

<p>学校運営連携校</p>	<p>群馬県立伊勢崎特別支援学校（対象：知的障害） 玉村町立上陽小学校</p>	<p>隣接型</p>	<p>カリキュラム・マネージャー</p>	<p>A：元特別支援学校校長 B：前橋国際大学短期大学部教授 C：群馬大学教授</p>
----------------	---	------------	----------------------	---

事業1年次の取組概要、成果・課題

カリキュラム・マネージャー3人のうち1人を特別支援学校に配置し、2か月に一度連携協議会を開くなど一体的な学校運営に向けて情報共有に努めた。両校児童による交流及び共同学習の授業は、上陽小学校知的特別支援学級（1～4年）6人と伊勢崎特別支援学校小学部3年生6人の児童が図工を中心に6回行い、実践によって得られた成果や課題を連携協議会で話し合っまとめた。また、授業づくりに取り組む中で、カリキュラム・マネージャーを中心に「交流及び共同学習授業打合せシート」を作成・活用した。

取組概要（事業2年次）



【交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方】

- ・通常の学級と特別支援学校との交流及び共同学習の授業を実施した。実施に当たっては、児童の学びを見守りながら支援する姿勢について、教諭、介助員、コラボレーター間で共通理解を図り、支援の在り方を統一した。また、両校が地理的に離れている実情を踏まえ、オンラインによる交流及び共同学習を取り入れ、継続的な学びの機会を確保した。
- ・授業では、全体で学習内容や手順を確認した後、実態に応じたグループ学習へと移行し、振り返りで再び全体に戻るなど、集団形態を柔軟に設定した。さらに、グループごとに内容や教材を工夫することで、一人一人の学びを丁寧に支援・保障することができた。一方で、オンライン環境下での相互の関わりや実践の校内共有の在り方、そして、図工等の非認知的な教科やイベント的な交流での成果を生かしながら、国語や算数等の認知的な教科における共同学習の実践が課題として挙げられた。

【教員や専門スタッフの配置等の工夫】

・両校の授業等を観察しながら特別支援教育や合理的配慮、交流及び共同学習等について助言できる教員（以下「インクルーシブ教育アドバイザー」という）1名を配置（特配）した。具体的には、通常の学級に在籍する特別な支援を要する児童への対応方法や指導方法の助言及び提案、児童の特性把握のための観察や記録の整理、指導法や教材の工夫に関するコンサルテーションを行った。また、県費で、児童同士が関わりながら学ぶことを支援する支援員（以下「コラボレーター」という）3名を上陽小学校に配置し、日頃の授業や交流及び共同学習での支援を行った。具体的には、特別支援学級の児童が通常の学級と一緒に学習する際、集団活動の中子供同士が関わり合いながら学べるよう、言葉かけをしたり、促したりする支援を行った。

①交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

【発展の方向性・ねらい】

- ・小中学校と特別支援学校の教員がそれぞれの授業スキルを活かしながら、多様な児童生徒と一緒に学べる授業づくりに取り組む。
- ・活動は一緒でもそれぞれ子供に合ったねらいを持ちながら、主体的に授業に取り組める学習環境作りに取り組む。

実施内容

対象学年	・伊勢崎特別支援学校小学部4年 ・上陽小学校4年(3年生、知的特別支援学級、自閉症・情緒障害特別支援学級、肢体不自由特別支援学級も含む)
回数 教科等	計5回 図画工作1回、生活単元学習4回(うちオンライン1回)
主な内容	図工:模様版画、ビー玉絵画、ガラスへの描画 生単:「みんなとつながる上毛かるた」上陽小児童が作った立体かるたとその遊び方によるグループごとの交流活動

【指導内容・指導方法の工夫】

- ・児童の学びを見守りながら支援する姿勢を教諭、介助員、コラボレーターなどで共通理解を図った。
- ・両校が隔たっているため、オンラインでの交流及び共同学習を行った。
- ・全体で授業内容や手順等の学習を行った後、グループに分かれてそれぞれで学習を行い、振り返りで再度全体での学習に戻るなど、授業集団を柔軟に変化させた。
- ・グループに分かれた後の学習はそれぞれの実態に応じて内容を変えたり、教材を加えたり、丁寧かつ柔軟に行うことで一人一人の学びを支援し保障した。



オンラインでの自己紹介



考えた遊び方で遊ぶ

【交流及び共同学習の成果】

- ・競技ゲーム的な状況下での心理的な安定を保ち、札やルールという環境を把握し、チームの一員として他者と関わる人間関係を形成し、競技参加という形でコミュニケーションを図ることができた。子供たちはお互いにとっても楽しんでいる様子が見られた。

②現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

【教員研修の実施】

- ・両校の研修担当(研修主任、研修部長)が緊密に連絡を取り、課題等を確認しながらオンラインで行った。
- ・両校の児童が学習している動画を事前に準備し、互いに視聴した。
- ・研修を通しての学びや気づきは、児童の発達に応じた題材の工夫、学習環境の整備と工夫、視覚支援の工夫、授業の運び方や一人一人への接し方の工夫、子どもが自分で選ぶ自由進度学習などがあった。
- ・通常の学級と特別支援学校の児童がどうすればうまく交流・学習ができるのか悩んでいるという率直な意見と共に、両校の教職員が共通理解を図り目的を明確にすることで児童にとって有意義な交流が可能になるのではないかという意見も出された。

【連携】

- ・交流及び共同学習の授業担当者達の打合せや振り返りなどにオンラインを活用した。
- ・授業担当者達は両校を相互に訪問し、児童の様子や施設設備等を確認しながら事前打合せを行った。

【校内体制】

- ・ブロックチーム担任制:低中高2学年ずつのブロックとし、担任が定期的に入れ替わるシステムを導入し、子供が多様な大人と関われる環境を構築。
- ・校内支援室「YUMEルーム」の設置:多様な困難を抱える児童がいつでも教室から離れて利用できる環境を構築。



両校のオンライン研修

本事業の成果(事業2年次)

【児童生徒】

・自立活動の項目「人間関係の形成」「心理的な安定」の面において、他者からの働きかけを受容する力や新しい環境へ適応する力といった、社会性の基礎となる領域で成長があった。

【教職員】

・上陽小の教職員は伊勢崎特別支援学校など特別支援学校の教育について、伊勢崎特別支援学校の教職員は上陽小など小学校の教育について双方が十分に理解していないことを知った。また、そのことを補うための一体研修として児童の実態の捉え方、教育課程や学習指導要領、指導や支援の方法、学校や教室などの教育環境などの理解の必要性を理解することができた。

前年度からの 変化・改善点

- ・1年次は交流及び共同学習に取り組む学級担任同士の意思疎通が図られ、立案や授業がスムーズに行われた。2年次は両校の研修担当者(研修主任、研修部長)同士が連携して一体研修を行うようになり、教職員の意識が高まるとともに意思疎通や交流及び共同学習についての理解が広がった。
- ・カリキュラム・マネージャーの他にインクルーシブ教育アドバイザーが加わったことで教職員への支援力が高まり、両校のインクルーシブ教育や交流及び共同学習などについて考える契機を提供できた。
- ・コラボレーターが加わったことで交流及び共同学習での支援力が高まった。

課題

今後の展望

- ・日頃の学級運営や授業においてユニバーサルデザイン的な考え方を取り入れ、発展的な交流及び共同学習に取り組むための素地を醸成する。
- ・これまで図工や音楽、体育等で行われることの多かった交流及び共同学習を国語や算数などの教科に広げていく。
- ・交流及び共同学習では、両校それぞれの教育課程に沿って同一の授業を異なる教科として実施したり、教科等横断的な学習で実施したりする。
- ・交流及び共同学習を充実させるために両校教職員が両校児童の実態を理解する、相互の教育課程や指導要領などを理解する、日頃の指導方法や学習方法などを理解する、日頃の学習環境などを理解するなどの研修を重ねる。
- ・離れた学校ではオンラインを活用して交流及び共同学習を補える可能性があることを提案
- ・小学校において特別支援学級の児童の実態や教育課程を協力学級の担任が理解し、授業を自然に受けられるようになるためにどのようなことが必要であるか、どのように取り組めばよいかを提案
- ・特別支援学校のセンター的な機能として、国語や算数などの教科における交流及び共同学習の事例提供
- ・コラボレーターや介助員などは、例えば専門性が高く経験が豊富なインクルーシブ教育アドバイザーなどのアドバイスや相談を受けることで飛躍的に児童理解や支援の力などを高めることができることを提案
- ・簡易で負担の少ない打合せシートや振り返りシート、指導案様式などの作成